

171 イエスを殺す計画、ベタニアで香油を注がれる

マタイによる福音書 26 : 1~5、マルコ 14 : 1~2、ルカ 22 : 1~2、ヨハネ 11 : 45~53

ヨハネによる福音書 12 : 1~8、マタイ 26 : 6~13、マルコ 14 : 3~9

・・・・・・前回に続き、ニサンの月の12日（火曜日）の出来事である・・・・・・
 （今日の箇所で、火曜日が終わる）

▶**イエスを殺す計画**（マタイによる福音書 26 : 1~5）・・・・十字架の予告・・・・

01 イエスはこれらの言葉（→オリーブ山での説教）をすべて語り終えると、弟子たちに言われた。

→「語り終えると（話し終えると等）」という表現（場面）は、イエスの公生涯のターニングポイントとなっている。

02 「**あなたがたも知っているとおりに、二日後は過越祭である。人の子は、十字架につけられるために引き渡される。**」

ニサンの月

第一の月の十四日の夕暮れが主の過越である。同じ月の十五日は主の除酵祭である。（レビ記23:5~8）

⑨聖書記述通りの図表示

十日	十一日	十二日	十三日	十四日	十五日	十六日	十七日	十八日	十九日	二十日	二十一日
夜	昼	夜	昼	夜	昼	夜	昼	夜	昼	夜	昼

10日:小羊を一匹用意する(出エジプト12:3)

● 4日夕暮れ:小羊を屠り、その血を二本の柱と鴨居に塗る(出エジプト12:6~7)

15日夜:小羊の肉を火で焼き食べる(出エジプト12:8)
 過越祭:主の過越し(出エジプト12:11、12)

十四日夕方

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

除酵祭:七日の間(十四日夕方から二十一日の夕方まで)
 酵母を入れないパンを食べる(出エジプト12:15、12:18)

バビロン捕囚前の暦

マタイによる福音書
 マルコによる福音書
 ルカによる福音書

記述が異なる

ヨハネによる福音書

公式のユダヤ暦

金	土(安息日)	日
夜	昼	夜

● 緑:過越祭→
 最後の晚餐→ ● 除酵祭の第一日、過越の小羊を屠る日(マタイ26:17、マルコ14:12、ルカ22:7、8)
 キリストの磔刑→ ● キリスト復活→ ●

金	土(安息日)	日
夜	昼	夜

● 緑:過越祭
 最後の晚餐→ ● 過越祭の前(ヨハネ13:1)
 キリストの磔刑→ ● 過越の準備の日(ヨハネ19:14)
 キリスト復活→ ●



→過越祭は、神がイスラエルの民をエジプトでの奴隷の状態から脱出させたことを祝う祭りである（出エジプト記 12 : 1~27）。過越祭は、第一の月（太陽暦の3月中旬の頃）の十四日の日没後から祝う。

除酵祭は、十五日から7日間続けられる（レビ記 23 : 4~8、民数記 28 : 16~25）。

→四度目の十字架の死と復活の予告→イエスは2節で、十字架の日を特定された。

一度目の十字架の死と復活の予告→マタイ 16 : 21、マルコ 8 : 31、ルカ 9 : 22

二度目の十字架の死と復活の予告→マタイ 17 : 23、マルコ 9 : 30、ルカ 9 : 43

三度目の十字架の死と復活の予告→マタイ 20 : 17、マルコ 10 : 32、ルカ 18 : 31

→イザヤ書 53 : 5（イエスの十字架の預言）

彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

03 そのころ、祭司長たちや民の長老たちは、カイアフアという大祭司（親ローマ、サドカイ派）の屋敷（の中庭）に集まり、04 計略を用いてイエスを捕らえ、殺そうと相談した。
 →カイアフアはローマ帝国からエルサレムの大祭司に任命された（AD18～44 頃）。大祭司は、神殿に仕える祭司たちの仕事を監督するほかに、祭司長やユダヤ人指導者たちで構成される最高法院の責任を負っていた。ローマ帝国は最高法院に、地域の諸問題に関する決定権を与えていた。

05 しかし彼らは、「民衆の中に騒ぎが起こるといけないから、祭りの間はやめておこう」と言っていた。
 →イエスとその教えを慕った多くの民衆が過越祭を祝うためにエルサレムに集まっていた。このため祭司長たちや民の長老たちは、イエスを慕う者たちがイエスが捕らえられる様子を見れば、自分たちに対して暴動を起こすのではないかと恐れた。

【参考】聖書に登場する「語り(話し)終えると」

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 6 / 聖句等の総数 33250]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳)
S マタイによる福音書	13:53 イエスはこれらのたとえを語り終えると、そこを去り、	
S マタイによる福音書	19:1 イエスはこれらの言葉を語り終えると、ガリラヤを去り、ヨルダン川の向こう側のユダヤ地方に行かれた。	
S マタイによる福音書	26:1 イエスはこれらの言葉をすべて語り終えると、弟子たちに言われた。	
S ヨハネによる福音書	13:21 イエスはこう話し終えると、心を騒がせ、断言された。「はっきり言っておく。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている。」	
S ヨハネによる福音書	18:1 こう話し終えると、イエスは弟子たちと一緒に、キドロン谷の向こうへ出て行かれた。そこには園があり、イエスは弟子たちとその中に入られた。	
S 使徒言行録	15:13 二人が話を終えると、ヤコブが答えた。「兄弟たち、聞いてください。	

▶ベタニアで香油を注がれる（ヨハネによる福音書 12：1～8）

01 過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。

02 イエスのためにそこで夕食が用意され、(姉の) マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。

→マルタという名前はおそらくアラム語から来ており、「彼女は反逆的であった」を意味する。

→ラザロ（ヘブライ語）：神は助ける。



03 そのとき、(妹の) マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ（＝約 320 g）持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りですばいになった。

→香りの軟膏や油は、封印された壺に保管され、開けるには壺の首を折らねばならなかった。

香油は甘松（かんしょう、左図）から造られ、輸入されたので非常に高価だった。

甘松は、オミナエシ科（新しい分類体系の APG 体系ではスイカズラ科）、

ヒマラヤ山系、中国山岳地帯原産の植物で根や根茎を使います。



04 弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。

05 「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」

→デナリオン：1 デナリオン銀貨＝労働者の日給

【参考】イスカリオテのユダ Judas Iscariot イスカリオテ出身

イエスはイスカリオテ（→ケリオテ出身の男の意味、もしくはうそつきの男、裏切り者の意味）のユダを愛し、信頼してお金を任せた（財務担当）。しかしユダは、食欲に走って歴史上の裏切り者となった。イエスは、彼の裏切り行為を知って、「わたしと一緒に手で鉢に食べ物を浸した者が、わたしを裏切る。人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」（マタイによる福音書 26：23、24）ときびしく戒めている。最後にイエスはゲツセマネで、「友よ、しようとしていることをするがよい」（マタイによる福音書 26：50）とユダに告げた。イエスは彼を友と語りかけて赦している。イエスを銀貨 30 枚で売り渡したユダは、イエスに死刑判決が下ったことを知って後悔した。「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」（マタイによる福音書 27：4）と言って大祭司カイアファに銀貨を返そうとしたが、ユダヤ教の祭司たちは拒絶した。ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り、自殺した。

06 彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。彼は盗人であって、金入れ（→箱型の財布）を預かっていたながら、その中身をごまかしていたからである。（そして、この香油も、売れば結構な金になると考えたからである。）

07 イエスは言われた。

「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それ（→香油）を取って置いたのだから（→リビング・バイブル：マリヤはわたしの葬りの準備をしてくれたのです）。

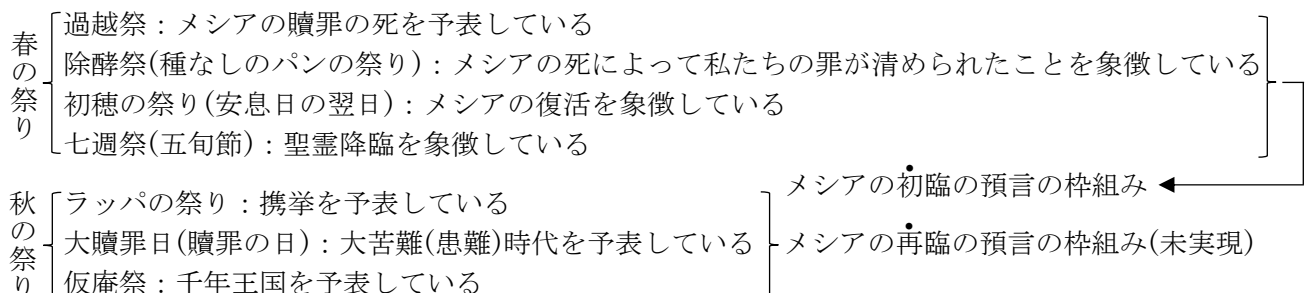
08 貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつ（まで）も一緒にいるわけではない。」（残念なことに、マリアだけが、イエスの死が間近に迫っていることを分かっていた。）

【参考】イスラエルの祭り(レビ記 23 章)とメシアの生涯

太陽暦・ユダヤ暦・バビロニア暦

太陽暦	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
月（ヘブライ暦）	第一の月	第二の月	第三の月	第四の月	第五の月	第六の月	第七の月	第八の月	第九の月	第十の月	第十一の月	第十二の月	
ユダヤ暦	ニサン Nisan, Nisan	イヤール Iyyar	シバン Sivan, Sivan	タムーズ Tammuz	アブ Abh, Av	エルール Elul	ティシュリ Tishri	マルヘシュバン Marcheswan	キスレーヴ Kislev, Kislev	テベット T'ebheth	シュバット Shebat	アダール Adhar, Adar	
バビロニアの月名 0：カナン古称	ニサン (アピブ)	イヤール (ジウ)	シワン	タンムズ	アブ	エルル	ティシュリ (エタニム)	ヘシュワン (ブル)	キスレウ	テベト	シェバト	アダール	
主な行事	七週間		七週祭(シャブオット) 新月 五旬祭(ペンテコステ Pentecoste ギリシア語)				1：新年 10：大贖罪日 15～21：仮庵祭(スコット) 満月		25：宮清めの祭 (ハズカの祭り) (25日～8日間)				
	14～21 過越祭(ペサハ) 満月 除酵祭		※ユダヤの三大祭：過越祭、七週祭、仮庵祭				①イエス・キリストが過越祭の時に、子羊として十字架にかけられ、殺された。 ②三日目によみがえられた。→復活祭						

- ・ユダヤ暦は、日本の旧暦と同じく、月の満ち欠けを基準に月を決める方式（太陰太陽暦）です。
- ・ユダヤ暦は、一日が日没（夕方）に始まり、次の日の日没（夕方）に終わります。それは、聖書の創造の記事に「夕べがあり、朝があった」（創世記 1：5 他）と記されているからです。
- ・イスラエルでは普段の生活には、西暦も使っていますが、ユダヤ教の祝祭日や公式行事はユダヤ暦によって決められています。
- ・ユダヤ暦は天地創造を起点にして数えることになっており、西暦+3760年（西暦よりも3760年長い）となる。



【参考】カイアフア Kayafa

ユダヤの大祭司（在位：AD18年頃～44年頃）で、カイアフアは父の名で、正確には「カイアフアの子ヨセフ」である。サドカイ派で、イエスを引見する場面等で登場する（イエス殺害計画の首謀者）。大祭司であるカイアフアは地域の諸問題に関する決定権や祭司たちの統括権を持ち、ユダヤ最高法院の議長でもあり、イスラエルの宗教、政治の指導者たちの間で、絶大な力を持っていた。そして、イエスを死刑にするための裁判も指揮した。裁判の後、イエスはローマ帝国ユダヤ総督ポンティオ・ピラトに引き渡した（マタイ 27：2、マルコ 15：1、ルカ 23：1）。

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数：10 / 聖句等の総数 33250 (カイアフア)10個]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) [検索語彙：カイアフア]
S マタイによる福音書	26:3 そのころ、祭司長たちや民の長老たちは、カイアフアという大祭司の屋敷に集まり、	
S マタイによる福音書	26:57 人々はイエスを捕らえると、大祭司カイアフアのところへ連れて行った。そこには、律法学者たちや長老たちが集まっていた。	
S ルカによる福音書	3:2 アンナスとカイアフアとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。	
S ヨハネによる福音書	11:49 彼らの中の一人で、その年の大祭司であったカイアフアが言った。「あなたがたは何も分かっていない。	
S ヨハネによる福音書	11:51 これは、カイアフアが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。	
S ヨハネによる福音書	18:13 まず、アンナスのところへ連れて行った。彼が、その年の大祭司カイアフアのしゅうとだったからである。	
S ヨハネによる福音書	18:14 一人の人間が民の代わりに死ぬ方が好都合だと、ユダヤ人たちに助言したのは、このカイアフアであった。	
S ヨハネによる福音書	18:24 アンナスは、イエスを縛ったまま、大祭司カイアフアのもとに送った。	
S ヨハネによる福音書	18:28 人々は、イエスをカイアフアのところから総督官邸に連れて行った。明け方であった。しかし、彼らは自分では官邸に入らなかった。汚れないで過越の食事をするためである。	
S 使徒言行録	4:6 大祭司アンナスとカイアフアとヨハネとアレクサンドロと大祭司一族が集まった。	

ユダヤ人の歴史家のフラウィウス・ヨセフス※1によると、カイアフアはAD18年頃に大祭司となった。大祭司アンナス（在位：AD6～15年）の義理の息子（婿）で、ローマ総督の任命によって大祭司となった。これは当時のユダヤではハスモン朝※2以来の伝統で大祭司が王と同じように政治的な影響力をもっていたことを示している。

イエスを捕らえた人々は、カイアフアより先にアンナスのもとへイエスを連れて行った（ヨハネ 18:13）ことから、アンナスが辞職後も大祭司としての称号を持ち、重要問題では助言を求められるなど、元大祭司として強い影響力を持っていたと考えられる。



カイアフアの前に立つキリスト/Mattias Stom 筆

※1：ヨセフス・ベン・マタティア（AD37年～100年頃）、帝政ローマ期の政治家及び著述家。

AD66年に勃発したユダヤ戦争で当初ユダヤ軍の指揮官として戦ったがローマ軍に投降し、ティトウスの幕僚としてエルサレム陥落にいたる一部始終を目撃、後にこの顛末を記した『ユダヤ戦記』を著した。

※2：BC140年頃からBC37年までユダヤ（イスラエル）の独立を維持して統治したユダヤ人王朝。BC166年に起きたユダ・マカバイ（マカベウス）によるセレウコス朝軍への決起から20年後に成立。フラウィウス・ヨセフスによればハスモンという名は一族の先祖、祭司マタティアの祖父の名前に由来しているといわれている。